

社会関係資本から社会学的問いを鍛える

三隅，一人

<https://doi.org/10.15017/7388830>

出版情報：大学院からはじめる社会学研究：問いを鍛える作法：三隅一人教授退職記念論集，pp. 182-195，2025-10-01．三隅一人教授退職記念論集刊行委員会

バージョン：

権利関係：



社会関係資本から社会学的問いを鍛える

三隅 一人

◎本章のねらい

社会関係資本による社会学的問いの特定化のプロセスを、著者の研究体験をふまえて例解的に示す。それにより、大学院に進学する社会学の初学者や、社会学的観点を組み入れた学際研究を企図する研究者が、社会関係資本のような社会学の主要概念を手がかりに自らの社会学的問いを構築する、その手引きとする。

◎とくに読んでほしい人

あなたは大学院での研究で初めて、社会学的視点からの研究展開を考えている。人びとの協力的行動に関わることなので、社会関係資本の概念が使えるそうだが、どう使えばよいか悩んでいる。

1. レビューという問いの洗練

社会関係資本に関しては、社会学に限らず広い研究分野で分厚い研究がある。「どう使えばよいか悩んでいる」とき、まずどこから手をつけてよいか分からない、ということがあろう。そこは論文を読み漁るしかないのであるが、数年先の学位取得という時間制限を考えれば手当たり次第というわけにもいかない。どの論文から読むか、そして、落とせない論文はどれかの、当たりをつける必要がある。研究蓄積がある概念であれば、レビュー論文や、研究書や概説書の中に先行研究のレビューにあてた章がある。こうした既存レビューのレビューを行うことをお勧めする。そこで共通して紹介されているものをたどって基礎文献を知ることができるし、特定の主題に関する重要文献の目星をつけることもできる。あとは、それらの論文にあたり、さらに引用文献をたどって芋づる式に、落とせない論文リストを絞りつつ拡充していく。

筆者が大学院学生だった頃（1980年代）は、よく何日も大学図書館にこもって文献探しをしたものだ。その後インターネットが普及してからは、デジタルベースの文献探索が随分

とやりやすくなった。社会学分野の学会誌の電子化も進んでいる。今日であれば、この探索プロセスで生成 AI を活用するのも有効だろう。ただし大事なことを忘れてはいけない。レビューは、先行研究をどのようにふまえつつ、そこにどういうオリジナルなアイデアを付加できるかを確かむために行う。研究の足場が社会学ではないのであれば、社会関係資本の概念をどのように組み込むことで、足場とする研究分野にどういうオリジナルなアイデアを付加できるかを確かめたか、ということが大事である。

時折、レビュー部分に先行研究が羅列されているだけの論文をみかける。それは、読書量はアピールできても、意味あるレビューになっていない。生成 AI は重要文献のリストだけでなく、リサーチクエスチョンをどう立てるかまで踏み込んで提案をしてくれるだろう。けれども、そのままそれに乗っかっていては、オリジナルな研究はできない。AI は、あなただけに特別なことを教えてくれる魔法のツールではないのだから。

仮に AI の力を借りたとしても、自らの研究の問いが明確でないと、このレビューのプロセスは悶々としたものになるだろう。問いを明確にするためにレビューをしているのに、有効なレビューには明確な問いが必要だというのは、無理な話だと思われるかもしれない。しかし、問いの明確化とレビューの拡充は、往還的に進むものだ。最初は少しぼんやりとした問いでもよい。あなたが、社会学的視点、なかでも社会関係資本の概念が必要だと考えたその理由が、大事な出発点の問いになる。その問いを明確化することを常に意識して、レビューを行うことが肝要である。

レビューは、少なくとも論文においてそれを書くときには、自分自身の問い、そしてそのオリジナリティを、従来の研究をふまえて説明するものでなければならない。したがってレビューで取り上げる文献は、多少なりとも選別的になる。先行研究の論文を 100 本読んで、選別的に自分の論文に使える文献が 10 本もあれば、レビューした甲斐はあるというものだ。繰り返しになるが、読んだ 100 本を手当たり次第示すのがレビューの趣旨ではない。どう選別したかが重要なのである。重要文献とされるにもかかわらず取り上げない、あるいは批判的に依拠する文献があるときには、その理由を説明する。その説明は、裏返せばあなたの研究のオリジナリティの説明になるであろう。

これまでややあいまいに「問い」と称してきたが、問いにはいくつかの段階ないし水準がある。これまでは、論文全体の目的ともいえるリサーチクエスチョンを念頭においてきた。

「問い」の中でもとくにこれは重要で、入試の面接や研究進捗のゼミ報告等でもよく問われる。もちろん論文中でも、すでに述べたように、レビューをふまえてこれをしっかり示す必

要がある。

かつて社会科学の分野では「問題意識は何か」とよく問われた。これに対して、「個人的にこの現象に興味があるから」では答えにならない。そこで期待されているのは、その現象が社会の構造的問題にどのように関係しているのか、そして、その構造的問題はそもそもどういう意味で問題なのか、ということの説明である（と、筆者は理解していた）。今日、リサーチクエスションの背後にある理論仮説が、こうした「問題意識」まで遡って問われることはあまりないだろう。しかし、他分野の学生が社会科学を学ぶときに、少なくとも研究の社会的意義に関して、自問してみる価値はある。

こうした問題意識を踏まえるかどうかは別として、リサーチクエスションは何ほどか特定化された理論仮説を示すことが望まれる。例えば、「事象 A にどういう意味があるのか」といった漠然とした問いにとどまらず、「これまで見落とされてきた観点 α からみると、事象 A の別の意味がみえるのではないか」といった具合に、理論仮説的に問いを特定化する。

「別の意味」をさらに特定化して述べることであれば、研究のオリジナリティ（従来の研究では明らかにされていないどういったことを示せるか）をより直裁的に伝えることができるだろう。

研究のオリジナリティは、新たな観点や概念のほかに、新たな事例や対象に拠ることもある。この場合も、例えば「〇〇国では事象 A はどうなっているのか」といった漠然とした問いでは不十分である。仮に〇〇国で事象 A に着目した先行研究がないとしても、それだけではオリジナリティの根拠にはならない。やはりここでも理論仮説が必要であり、それは例えば、〇〇国で事象 A が異なることがわかれば、事象 A を説明する理論に新たな観点を提示できる、といった見立てである。ここでも「新たな観点」をさらに特定化して述べることであれば、研究のオリジナリティをより直裁的に伝えることができるだろう。

ちなみに、〇〇国で事象 A に着目した先行研究がないので十分にレビューができなかった、という趣旨の弁明をしばしば目にするが、研究のポイントは事象 A を説明する理論にあるべきであり、そうであれば、〇〇国以外の事象 A の先行研究をレビューすべきである。

リサーチクエスションをどこまで特定化するかについて基準があるわけではない。先行研究が乏しい分野ないし概念だったり、対象が新規ないし希少な事象だったりする場合、研究は探索的になるだろう。探索的研究では、出発点のリサーチクエスションが漠然とした問いになるのはやむを得ない。ただしこの場合でも、研究を進める過程でリサーチクエスションの特定化を進めてほしい。それは背後の理論仮説の明示化ということでもある。リサーチ

クエスションの特定化を進める際には、その都度新たな先行研究のレビューが必要になる。レビューは、それ自体が問いの特定化（ないしは展開）のプロセスであり、論文を書くためにどこかで区切りをつける必要はあるが、本来的には研究が続く限り完結することはない。

課題 1) 自分が考えている研究の問いを 100 字くらいで説明してみよう。それは社会学の（あるいは自分が拠って立つ学問分野の）どういう議論に照らしてオリジナルな意義ある問いになっているだろうか。

2. 社会関係資本との出会い：筆者自身の経験から

筆者は大学院の頃から、囚人のジレンマや公共財へのただ乗り为代表される社会的ジレンマに関心をもち、その解決を社会学的観点から研究してきた。社会的ジレンマは、個人の合理的選択が集積されて社会的に望ましくない結果を生む現象を指す。つまり、自己利益を最大化しようとする個人間の相互行為プロセスが、市場の均衡のような正の創発性のみならず、負の創発性を生むことがあることを、示している。社会的ジレンマの解決は単純に言えば、すべての当該行為者から協力行動を引き出すことである。

解決だけを考えるならば、人間の合理性を含めて問題の前提となる諸仮定を緩めれば、さまざまな現実的解決の方策はみえてくる。しかしすべての行為者が自ら自発的に協力するには、協力が自己利益にかなう合理性が担保になる。したがって理論的には、個人の合理的行為の仮定を崩さずに、何らかの社会的仕組みによって当事者が自ずと協力行動をとる、そうした社会的仕組みを解明したいところだ。筆者が社会関係資本に着目した理由には、この概念によって、合理的選択理論の枠内でそうした社会的仕組みを社会関係や社会構造の観点から論ずることができるのでは、という目論見があった。

その一方で躊躇があった。当時筆者は、社会的役割による行為の二重依存性 *double contingency* の調整過程の理論化を進めていた。その理論に社会関係資本をどう関連づけられるかが見えなかった。それ以前に、社会関係資本がいつていることは、社会学が昔から論じてきたことのいい換えに過ぎないのではないか、という当惑があった。

社会関係資本は社会学的な学術概念としては、1980 年代から、ピエール・ブルデュー (Bourdieu 1980, 1986) が階級（その文化的再生産）を補強する資本の一形態として、また、ジェームズ・コールマン (Coleman 1987, 1988) が合理的な協力行動を条件付ける社会構造の仕組みという理論枠組みで、先駆的議論を始めていた。しかしながら個々の議論としては、

関連する研究がずっと前からある（三隅 2013: 1 章、2 章）。社会学理論は社会的行為から社会の構成や動態を説明するものが多いが、社会関係や社会構造に着目する理論系譜もある。社会関係の形式に着目したゲオルク・ジンメル社会学、その流れを発展させたピーター・ブラウの社会構造論、都市化による社会構造の解体を論じた都市生態学的な都市社会学、そこで発展してきたパーソナルネットワーク論、そして、ソシオメトリーから発展してきたグラフ論的な社会ネットワーク論、等々。そこに社会関係資本という新たな概念枠をおく意義はあるのか。信頼は信頼、規範は規範、ネットワークはネットワーク、それでよいのではないか。その当惑である。

実際、主要な社会関係資本論者の何人かは、かつては違う概念枠で同じ議論を行っていた。ナン・リンは、地位達成においてコンタクトがもつ資源の活用効果を、社会的資源論 *social resource theory* として論じていた（Lin 1981a, 1981b）。ロナルド・バートは弱い紐帯による橋渡しを、社会ネットワークの構造的空隙 *structural holes* として論じていた（Burt 1992）（個人レベルでは仲買行動 *brokerage*）。弱い紐帯の強さ *strength of weak tie* 理論を打ち出したマーク・グラノヴェターの論文（Granovetter 1973, 1974）に、社会関係資本の用語は登場しない。

しかしそうした諸議論が、論者たち自身の研究展開を含めて、看板替えなどなかったかのように社会関係資本という 1 つの概念枠に組み替えられていく。裏返していえば、これまでばらばらに議論されていたことが、同じ社会関係資本という仕組みの異なる要素や側面の話として関連付けられていく。社会関係や社会構造に着目する理論系譜についても同様に考えれば、社会構造の成り立ちや動態を、信頼、規範、ネットワークからばらばらに論じるのではなく、社会関係資本という 1 つの概念枠で包括的に論じ直すことができるのではないか。包括的とはいっても抜け落ちる論点は少なくないだろうが、それはむしろ社会関係資本の概念を社会的に発展させるポテンシャルとも考えられる。

こうして、レビューを重ねて筆者が確信を強めたのは、一言でいえば、社会関係資本の関係論的 sociology 理論を統合する鍵概念としての可能性である。さらに、最初に見立てとして述べたように、「資本」概念に依拠するので、リターンを見越した投資（Lin 2001）という合理的選択の枠組みが基本になる。Granovetter（1985）の用語を拝借していえば、社会関係資本は社会構造に埋め込まれた目的的行為を捉える概念枠組みなのである。したがってそれは、関係論的 sociology 理論の統合だけでなく、行為論的 sociology 理論との融合という意味でも、鍵概念になり得る。

この確信を自分なりに形にしたのが拙著『社会関係資本——理論統合の挑戦』（2013 年、

ミネルヴァ書房)であり、副題が上記のリサーチクエスションの趣旨を示している。どこをどう統合・融合するかは手探りの挑戦だったため、この概念との出会いから20年以上かかってしまった。規定年限で学位取得を目指す読者にとっては、リサーチクエスションの特定化が甘いとこれだけ時間がかかるという悪い見本である。

3. 社会関係資本の問いを鍛える

社会関係資本の筆者自身の研究への導入に関わる大枠のリサーチクエスションは前節で述べたとおりだが、このように抽象度が高い問いだと、データと付き合わせた実証までまだ距離がある。より具体的に、社会関係資本論としてオリジナルな貢献をどうなしうかを問う必要がある。行為が社会構造に埋め込まれていることで社会関係資本の仕組みの中に位置づけられるとして、そこにどういうオリジナルな問いを立て得るか、である。そうしてリサーチクエスションを特定化できれば、そこからさらに経験的な仮説を特定し、一方ではデータを収集して、実証の手続きに落とし込む。ここでいう経験的な仮説は「男性より女性の社会関係資本が多いだろう」という類いのものだが、いうまでもなく、なぜそう予測できるのかの説明が一段上のリサーチクエスションで特定化されていなければ、この仮説は理論的意味をもたない。研究の問いの特定化のレベルはさまざまあるといったが、ばらばらではいけない。

さて、社会関係資本の問いの特定化である。

行為を起点としてみれば、合理的行為に対する社会構造の影響という問いが成り立つ。これについてはネットワークと交換の切り口での研究蓄積があるし、社会関係資本論としてもナン・リンの地位達成アプローチがこれに近い。前述のように筆者は、社会的役割による行為の二重依存性の調整プロセスを考察していた。役割体系は社会構造の主要素なので、この役割の規範的働きが合理的選択にどう影響するかを考慮すれば、社会関係資本の仕組みの新たな社会学的側面を論じられるかもしれない。役割に着目した社会関係資本論は皆無だったので、意味ある結論にこぎ着ければオリジナリティは十分ある。

実際に考案したのは、役割次元(役割規範による役割遂行)と行為次元(合理的選択による相互行為ゲーム)を考慮したモデル研究であった(Misumi 2004)。例えば、行為次元の相互行為が「協力」か「裏切り」かをめぐる四人のジレンマゲームであるとき、行為次元では「裏切り」が合理的選択として指示される。けれどもプレイヤー間に役割関係があると、役割次元で規範的に期待される行為選択は逆に「協力」であるかもしれない。このときもし役

割次元の行為指示に従わなければ、プレイヤー間の役割関係は支障をきたし、その後ゲームが繰り返される蓋然性は小さくなっていく。このようなモデリングの下で、長期的にみた場合に行為次元と役割次元のどちらに従うのが合理的か、その条件を分析した。

合理的選択理論に忠実にいえば、役割規範の影響は行為次元に吸収される（効用関数の形成に取り込まれる）とみるべきかもしれない。しかしながら、行為次元の「したい」と役割次元の「すべき」が葛藤するようなことは、日常的に経験されることである。このとき役割次元に従うことが合理性をもつならば、それは、役割がなければそれぞれが好き勝手していたところ、役割規範によって協力関係が促される意味で、社会関係資本の働きを示している。この観点を拡張すれば、葛藤への対応として行為者が社会構造に働きかけて（例えば友人に助けを借りる）、双方がより満足いく結果を導くような社会関係資本の働きを捉えることもできるだろう。いずれにしても社会関係資本はそこにおいて、両次元を分けつつ同時に捉える概念枠組みを提供する。

こうした社会関係資本と役割（あるいは合理的選択と規範）の関係づけについては、Montgomery（1998）や Kroneberg et al.（2010）等の示唆に富む研究展開があるが、筆者自身の研究は進められていない。実は前述のモデル研究は、社会関係資本ではなく役割を主題とした筆者の博士論文（Misumi 2007）の中で、役割のダイナミクスを説明する理論の一つとして位置づけたものである。正直をいえばその時点で、このモデルを社会関係資本論の文脈で捉え直す宿題を忘れていた。ある着想が意味をもつ理論文脈は一つとは限らず、そのことが理論統合の重要な示唆をもっている。しかしその着想をどれかの文脈のみで論じてしまうと、その統合的ポテンシャルティを忘れてしまいがちである。筆者自身、これを教訓としたい。

これまでは行為を起点とした研究例だが、コールマンやバート、パットナムのように個人レベルよりは集合レベル（集団、団体、地域、国など）に焦点をおいてアプローチする場合は、社会構造を起点としてみることになる。

ミクロ（個人）とマクロ（社会構造）の両面から論じることができるのは、しばしば議論が混乱する原因でもあるが、基本的にはこの概念のおもしろさである。どちらからアプローチするにせよ、社会関係資本のどのような仕組みに着目するのかは明示するようにしたい。両レベルをつなぐためにマルチレベル分析を用いた実証的アプローチは方法論的に整合的であり、社会関係資本の分析手法として定着した感がある。この際にも、集計レベルで社会関係資本のどのような仕組みを想定するのかがあいまいであれば、理論的には空虚な議論

になりかねないので注意が必要である。

さて、社会関係資本の主要論点のひとつに、結束 **bonding** と橋渡し **bridging** の両立というネットワーク構造特性がある (Burt 2001, 2005)。これは、高密度の結束部分を橋渡しして希少な資源や情報の流通を促す際に、非冗長な紐帯 (ブリッジ) が効果的であることを指している。非冗長な橋渡し紐帯の構築をめぐる競争から生じるネットワークダイナミクスも、興味深い論点である。この種の構造分析は、集合体を構成するすべての人びとの間の関係を調べて作られるソシオメトリックなネットワーク・データで可能であり、通常的な社会調査で収集されるパーソナルネットワーク・データには適用できない。回答者の友人同士の関係を聞いてネットワーク密度を定義した Wellman (1979) のような調査の工夫はあるが、少なくともブリッジのような構造特性を測定することはできない。

そこで筆者は暫定的な測定法を考案した。その思いつきはインスピレーションのようなものだが、社会関係資本が社会ネットワークを含む概念であるからこそ思いついたものであり、とても小さなことかもしれないが、ひとつの理論統合の試みといえるだろう。着眼したのは、個人の団体所属から団体間のネットワークを捉える所属行列の手法 (Breiger 1974) である。個人の集団所属を表す所属行列に、それ自身の転置行列を左側から掛け合わせた行列から、個人をコネクターとした集団間の関係がわかる。注意したいのはこの場合、集団間の関係が個人間の紐帯ではなく、個人の複数集団への所属によることだ。この意味での集団間の橋渡しを論じるために、筆者は関係基盤 **net-base** という概念を新たに導入した (Misumi 2005, 2008, 2014)。

関係基盤は血縁、地縁、学校や仕事、趣味の縁、宗教、民族、国民等の信条的な縁のように、社会ネットワーク形成の基盤となる属性 (ただしアイデンティティのような主観的な意味を含む) である。個人が複数の関係基盤に関与することで、それらの関係基盤上に展開する社会ネットワークが結節点をもつことになる。この結節点の非冗長さは紐帯の希少性ではなく、当該の個人が関与する関係基盤の希少性、いいかえれば当該個人のマージナルパーソンとしての唯一性による。より一般的には、社会構造がもつ橋渡し機能の蓋然性は関係基盤の交差で、また、結束機能の蓋然性は関係基盤の重層で捉えられる。関係基盤の交差は、ジンメルやブラウが論じてきた社会圏の交差に近い。社会構造を起点に社会関係資本の働きを捉えるためには、このようにネットワークと社会構造を重ねてみる視点が必要なのだが、従来の橋渡し社会関係資本の議論はその視点を欠いていた。

関係基盤の概念によって社会構造レベルの社会関係資本に実証的に迫ろうとした試みは、

拙著（三隅 2013）の第Ⅱ部にある。そこでのリサーチクエスチョンは、当該の社会構造において社会ネットワーク形成の基盤となっているアクティブな関係基盤はどのような布置連関を構成しているか、というものであった。そして方法論的には、社会構造に起点をおく社会関係資本研究のために通常的な社会調査で測定すべきは、パーソナルネットワークではなく、集団・団体所属そしてまた社会的アイデンティティ意識であることを示した。この研究は、社会関係資本の概念によって関係論的社会学理論の統合がいかんにして可能かという大枠のリサーチクエスチョンを特定化したものと位置づけられるだろう。

課題 2) 課題 1 で考えた問いの、特定化のレベルを再考しよう。それは、さらに上位の問い（なぜ課題 1 の問いを意味あるものとして措定できるかの説明）を必要としていないだろうか。一方で、その問いは、データとつきあわせて検証できる仮説を導けるほどに特定化されているだろうか。

4. 社会関係資本のススメ

社会学以外の研究において社会学的観点の必要性が問われるとき、それは対象の事象をとりまく社会的環境への配慮だったり、何らかの技術や制度の導入に関わる社会的諸要因の影響の考慮だったり、ということが少なくないだろう。社会学では、新しい理論が従来の理論を吸収するような体系だった理論発展がなく、古典まで遡って学ぶことが推奨される。あるピンポイントの「社会学的観点」のために短期間で社会学をフルスペックで学ぶのはなかなか大変であるし、それが不可欠だとも思われない。もし、必要と考えられる「社会学的観点」が、人びとの集まりやつながり、とりわけ協力関係に関わるならば、社会関係資本を手がかりに社会学の海に船をこぎ出すことをお勧めする。この海図作りの航海が効率的だと思われるのは、社会関係資本がもつ次のような「強み」による。（この強みを生かすことが無条件に望ましいといっているわけではないので、ご注意ください。）

第一に、社会関係資本の概念は、社会関係およびその集積としての社会構造の観点から議論されてきた、社会学の多くの論点をカバーする。この概念を、そのバックグラウンドまで広げつつしっかり学べば、古典に遡る関係論的社会学の世界図を要領よく作ることができるだろう。本稿で論じたように社会関係資本は、それ自体が概念的に幅広さを持ち、いくつかの異なるバックグラウンドが重なり合うので、どの議論系譜にフォーカスするかを念頭に置く方がよいだろう。

さらに割り切っているならば、1つの概念で関係論的な社会学の多くの論点を背負っている。で、「社会学的観点も必要ですよ」という研究上の必要に手っ取り早く応えるときに、便利である。「社会学的観点」の代名詞にはならないとしても、代表選手にはなり得ると思う。

第二に、この概念は先駆的には 1980 年代、本格的には 21 世紀に入ってから使用されるようになった比較的新しい概念なので、レビューの年代的範囲の区切りをつけやすい。本稿で紹介したように「昔の名前」のような概念系譜はいくつかある。それらを知っておくに越したことはないが、当該の論者たちが自ら概念的に吸収発展させているので、知らずとも前進できる。

第三に、学際的な研究バックグラウンドの利点がある。そもそも「資本」として社会学と経済学にまたがるので、学際的な研究展開が盛んになされてきた。開発経済学では 1990 年代から世界銀行が技術開発支援の定着を促す要件として注目し、大きな論点となった (Dasgupta and Serageldin 2000; 佐藤 2001)。政治学でも 1990 年代からロバート・パットナムが一連の研究 (Putnam 1993, 1995, 2000) を発表し、とくに社会関係資本の衰退（直接的にはボランティア・アソシエーションの非活性化）からアメリカ民主主義の危機を訴えた議論は、TIMES の表紙を飾るほどに世論の注目を集めた。21 世紀に入ると、災害研究の論点としても定着し (Aldrich 2012)、マルチレベル分析の発展とあいまって健康、教育、福祉の分野で実証研究が数多く展開された。

したがって多様な分野でレビューがやりやすい。本当にピンポイントの「社会学的観点」でよいのであれば、本家の社会学に足を踏み入れずとも、より近い分野の社会関係資本研究のレビューによってリサーチクエスションを定められるかもしれない。（一方で、すべての分野を網羅しようとすればそれはそれで大変ではある。）

第四に、計測性がある。本稿で紹介した主要研究は、ブルデューのような一部の論者を除いて、実証的である。前述したように通常的な社会調査で得られるネットワーク情報は限られているが、あらかじめ代表的な職業を示して友人・知人関係の有無を尋ねる位置想起法 position generator (Lin et al. 2001) のように、紐帯の構造的布置を捉えようとする測定法も考案されている。筆者の関係基盤論も、社会構造におけるネットワークの布置連関を捉える工夫であることはすでに述べた。

とくに学際的な研究においては、パットナムの定義から議論を始めるケースが多いが、これも計測性が関係していると思われる。彼の定義では具体的に社会ネットワーク、信頼、規

範が社会関係資本の主要素として示されるので、そのどれか、ないしすべてを取り上げて計測し、人びとの協力行動、あるいはまた、幸福度や健康状態、社会経済的な格差などを説明する統計モデルに説明要因として組み込むような応用がやりやすい。科学を標榜する学問分野ではデータの裏付けは必須なので、社会関係資本が計測性の高い概念であることは大きな強みである。

これまで社会関係資本の概念を基軸に論じてきたが、レビューの重要性や問いの特定化の必要性は、この概念に限ってのことではない。その意味で本稿は、問いの特定化に重点をおいた研究作法のガイドラインとして一般性をもつと考えている。とはいえ、読んでほしいのはやはり、社会関係資本に関心をもって研究を始めよう（進めよう）としている人や、社会関係資本を気にしつつ踏み込めないでいる人である。そうした読者がスムーズにこの概念に踏み込めるように、社会関係資本のテキストとしても読めるように気配りした。本書の趣旨は研究作法なので、テキストでは書きにくいことも盛り込むことができた。本稿がきっかけとなって、多くの方が社会学、とりわけ社会関係資本の研究領域に参入されることを期待している。

文献

- Aldrich, Daniel P., 2012, *Building Resilience: Social Capital in Post-Disaster Recovery*, Chicago: University of Chicago Press. (石田祐・藤澤由和訳, 2015, 『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か 地域再建とレジリエンスの構築』 ミネルヴァ書房.)
- Bourdieu, Pierre, 1980, “Le Capital Social: Notes Provisoires,” *Actes de la Recherche en Sciences Sociales* 31(Jan.): 2-3.
- , 1986, “The Forms of Capital,” Richardson, John G., *Handbook of Theory of Research for the Sociology of Education*, Greenwood Press: 241–58.
- Breiger, Ronald L., 1974, “The Duality of Persons and Groups,” *Social Forces* 53(2): 181-90.
- Burt, Ronald S., 1992, *Structural Holes*, Cambridge: Harvard University Press. (安田雪訳, 2006, 『競争の社会的構造 構造的空隙の理論』 新曜社.)
- , 2005, *Brokerage and Closure: An Introduction to Social Capital*, Oxford: Oxford University Press.
- , 2001, “Structural Holes versus Network Closure as Social Capital,” Lin, Nan, Karen Cook, and Ronald S. Burt (eds.), *Social Capital: Theory and Research*, New York: Aldine de Gruyter: 31-56. (野

- 沢慎司編・監訳, 2006, 『リーディングス ネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 7章.)
- Coleman, James S., 1987, “Norms as Social Capital,” Radnitzky, Gerard and Peter Bernholz (eds.), *Economic Imperialism: The Economic Approach Applied Outside the Field of Economics*, New York: Paragon House Publishers: 133-55.
- , 1988, “Social Capital in the Creation of Human Capital,” *American Journal of Sociology* 94: S95-S120. (野沢慎司編・監訳, 2006, 『リーディングス ネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 6章.)
- Dasgupta, Partha and Ismail Serageldin (eds.), 2000, *Social Capital: A Multifaceted Perspective*, World Bank.
- Granovetter, Mark S., 1974, *Getting a Job*. Chicago: University of Chicago Press. (渡辺深訳, 1998, 『転職 ネットワークとキャリアの研究』ミネルヴァ書房.)
- , 1973, “The Strength of Weak Ties.” *American Journal of Sociology* 78: 1360-80. (野沢慎司編・監訳, 2006, 『リーディングス ネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 4章.)
- , 1985, “Economic Action and Social Structure: The Problem of Embeddedness,” *American Journal of Sociology* 91(3): 481-510. (渡辺深訳, 1998, 『転職 ネットワークとキャリアの研究』ミネルヴァ書房, 付論D.)
- Kroneberg, Clemens, Meir Yaish, and Volker Stocké, 2010, “Norms and Rationality in Electoral Participation and in the Rescue of Jews in WWII: An Application of the Model of Frame Selection,” *Rationality and Society* 22: 3-36.
- Lin, Nan, 2001, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge: Cambridge University Press. (筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子訳, 2008, 『ソーシャル・キャピタル 社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房.)
- , John C. Vaughn, Walter M. Ensel, 1981a, “Social Resources and Occupational Status Attainment.” *Social Forces* 59(4): 1163-81.
- , Walter M. Ensel, and John C. Vaughn, 1981b, “Social Resources and Strength of Ties: Structural Factors in Occupational Status Attainment.” *American Sociological Review* 46(Aug): 393-405.
- , Fu, Yang-chih and Hsung, Ray-May, 2001, “The Position Generator: Measurement Techniques for Investigations of Social Capital,” Lin, Nan, Karen Cook, and Ronald S. Burt (eds.), *Social*

- Capital: Theory and Research*, New York: Aldine de Gruyter, 57-81.
- 三隅一人, 2013, 『社会関係資本 理論統合の挑戦』ミネルヴァ書房.
- Misumi, Kazuto, 2004, "The Complementarity of Normative Expectations in Rational Choice Frameworks." 三隅一人『解釈支援型フォーマライゼーションの試み』科研費報告書: 37-48.
- , 2005, "Whole-net Base and Social Capital: Stratified Opportunity Structure of Social Capital." 『理論と方法』20(1): 5-25.
- , 2008, "Social Capital on Net-Bases: A Methodological Note," *Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University* 14: 49-63.
- , 2014, "Net-base Theory of Social Capital," 『社会分析』41: 67-85.
- Montgomery, James D., 1998, "Toward a Role-Theoretic Conception of Embeddedness," *American Journal of Sociology* 104(1): 92-125.
- Putnam, Robert D., 1993, *Making Democracy Work: Civil Traditions in Modern Italy*, Princeton: Princeton University Press. (河田潤一訳, 2001, 『哲学する民主主義 伝統と改革の市民的構造』NTT出版.)
- , 1995, "Bowling Alone: America's Declining Social Capital," *Journal of Democracy* 6 (1), 65-78.
- (ed.), 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster. (柴内康文訳, 2006, 『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.)
- 佐藤寛 (編), 2001, 『援助と社会関係資本 ソーシャルキャピタル論の可能性』アジア経済研究所.
- Wellman, Barry, 1979, "The Community Question: The intimate Networks of East Yorkers," *American Journal of Sociology* 84: 1201-31. (野沢慎司編・監訳, 2006, 『リーディングス ネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 第5章.)

コラム：

文献を読んでメモを作るときには、以下に留意しよう。

- ・書いてある文章やその要約と、自分自身のコメントやアイデアを区別する。
- ・書いてあることを自分で要約する場合（外国語を翻訳して要約する場合を含む）は、自分による要約であることがわかるようにし、要約対象となる文章のページを記す。
- ・書いてある文章をそのまま書き出す場合は、「」をつける等して直接引用がわかるようにし、引用対象となる文章のページを記す。複数ページにまたがる場合、どこでページが変わるかがわかるようにマークしておく。
- ・文献リストの細かい書誌情報や引用のページ等は最後に論文を仕上げるときに整えればよい、と思うなかれ。必ずや後悔します。
- ・以上のことは、複写が容易なデジタル文献に関してとくに注意が必要です。